

『嘘でも』

人工太陽が沈む前からずっと、メリッサ・ガードナーは温泉の休憩所でレイザ・インダーを待っていた。

そういえば、ここには明かりなんてなかったなと気付いたのは、日が沈んでからで。窓から射し込む月明かりはほんの僅かで、殆ど何も見えない暗闇の中に彼女は居た。静かなその部屋で、孤独にどれだけ待っただろうか。

「いたのか」

ランタンを手にレイザが現れた時、自分はどんな顔をしていただろうか。

「ねえ、ウソでもさ、お前がいいとか言えないの？」

あの時、嘘でもそう言ってくれたら。

産んであげないなんて、言わなかった……言えなかった。

「そーゆーの、好……きな男に言われたら、落ちる、よ？ 簡単に……」

彼は何も答えない。

使命だからではなく。

欲しいのか、欲しくはないのか。彼の気持ちはわからないままだった。

「一緒に行く、バートくんの代わりとして。要らないとか言わないで。独りにしないで……」

「友人も、家族のような存在も、好きなことも、好きなものも沢山あるお前が、何を言っているんだ」

レイザの顔には困惑の色が表れていた。

「傍にいたいのは今のままのレイザくんだけ。レイザくんの望みを叶えるわけでもなく、赤ちゃんも授けずに独り残るのは無理。堪えられない」

切々と、声を絞り出すようにメリッサは言う。

「どうして、肉体がいるとわかるの？ 戻ってきた人いないのに」

「間違っははいないと思うが、憶測だ。過去そうして鎮めてきたからには、その通りに行く必要がある」

「レイザくんに痣があるのに、私に探させた理由は？」

「……よく知らなかったんだ。一族の力のことも、正しい鎮め方もなにも。だから洪水前から俺は痣を持つ者を探していた。聞きたいことが沢山あった」

そこまで本気で探してはおらず、メリッサへ依頼はしたが成果が得られるものだとは思っていなかったとこのとだった。

「自分の家族のことについては、子供のころ祖母が残した遺書で知った。祖父のアゼムは何も知らず、インダー家は火の魔力を統べる誇り高き一族だと教え込まれ、思い込んでいた」

その会話の後、2人はしばらく沈黙した。

「……メリッサ」

レイザの手が、メリッサの頬に伸びた。

「嘘でも、お前は落ちるのか？ 俺の思い通りになるのか」

彼の真剣な目に、メリッサは息をのんだ。

今から語られることは、嘘だ。嘘なんだと自分に言い聞かせる。

落ちたら、彼は絶対連れて行って欲しくない。

子作り目的以外では会って欲しくない。他の好きではない人と、偽装をしなければいけない……

…。

「お前がいい」

メリッサの心臓がドクンと跳ねた。

「身も心も、お前の全てが欲しい」

嘘とは思えない真剣な瞳を受けて、メリッサの思考が止まる。

「お前だけでいい」

その言葉の後、大好きな赤い瞳は見えなくなった。

代わりに、彼の温もりがメリッサの身体を包み込んだ。

「レイザくん……」

「生きたいなんて、言うな」

苦しげな声が、響いてくる。

「未来を求めないでくれ。」

世界の事なんて考えなくていい。

子供なんていらぬ。

もう他の誰のことも、何も見るな。

俺の事だけ。

俺だけのために——傍にいてくれ」

メリッサ・ガードナー